

12-13世紀イランにおけるニザール派像

伊 勢 村 茜

はじめに

ニザール派は、イスラーム教シーア派のイスマーイール派から分派した少数派集団である。ニザール派と言え、Assassin（暗殺者）の語源になった集団としてよく知られる。ヨーロッパからやってきた十字軍や旅行家は彼らのことを、山の老人なる人物によって意のままに使役される暗殺者教団として自国へと伝えた。その結果、彼らは伝説となって広く語られ恐れられたのである。この伝説とは内容が異なる点もあるものの、暗殺はニザール派が行っていた特徴的な活動の一つである。彼らは、社会や政治や宗教に影響力のある支配者階級の人物を狙った要人暗殺を組織化して行っていた。また、創始者ハサン・サッバーフ（?-1124年）によって1090年に獲得された本拠地アラムート城塞^①をはじめとする難攻不落の諸城塞を各地で獲得し、所持していた。これらの活動は、少数派集団である彼らが周囲の勢力に対してより効果的に損害を与える、また、自分たちを守るための方法であったが、周囲から恐れられ、反感を買って敵意を向けられる原因にもなった。そのため、史料におけるニザール派は「異端者」^②として語られることが目立つ。また、現在でもニザール派は「暗殺者教団」とも呼ばれており、彼らに対する「異端」なイメージは根強いと言える。

しかし、ニザール派は、1256年にアラムート城塞がモンゴル軍によって攻め落とされるまで、1世紀半以上の長きに亘って存続していた。いくら堅固な城塞にいたといっても、敵対する大規模な軍隊が攻め込んでくるとなるとひとたまりもなかったであろう。軍事拠点のみで長きに亘って集団を維持していくことは不可能であり、少数派集団である彼らが攻撃的な側面のみで周囲と渡り合っていたとも考えにくい。ニザール派には別の一面、すなわち、恐ろしく「異端」な集団という見方とは異なる見方、ニザール派像があったはずである。先行研究では、Farhad Daftary^③氏、Nadia Eboo Jamal^④氏、Peter Willey^⑤氏が、セルジューク朝の支配に憤慨していたイランの人々によってニザール派の活動は支援されていたと述べる。しかし、三氏と

もこの点について明確な根拠を提示していない。Edmund Bosworth氏は、ニザール派の一大勢力があったクヒスターン地域において彼らがセルジューク朝の支配に対する同地の人々の不満を利用して根付いていったと述べているが、氏も上の三氏同様にその根拠を明記していない。^⑥

そこで、本稿では、まず、第1章においてニザール派に対する呼称とその定義の変遷からイランにおける彼らの認識を明示したうえで、第2章ではニザール派滅亡後の彼らに対する認識を分析し、12-13世紀のイランにおけるニザール派像の一面を提示したい。残念ながら、ニザール派の内部史料はアラムート城塞が陥落した際に焚書されている。そこで、本稿ではニザール派の外部の人々が書いた史料を用いることによって、周囲の人々はニザール派をどのような集団として認識していたのかについて考察していきたい。

なお、以降、本稿で「ニザール派」と呼ぶ際には、ハサン・サッバーフを中心に1094年にファティマ朝から分派し、イランのアラムート城塞を本拠地として活動した集団を指す。

第1章 ニザール派とマラーヒダ

(1) ニザール派の呼称

ニザール派には様々な呼称があり、その定義も史料の著者ごとに異なる。^⑦ここでは、同時代に書かれた史料を執筆年代の古い順に見ていき、時代の経過とともにニザール派の呼称とその定義にどのような変化が見られるのかについて確認していきたい。とりあげた史料は、ニザーム・アルムルク^⑧『統治の書』(Nizām al-Mulk, *Siyāsatnāma*, 1087-92年執筆)、シャフラスターニー^⑨『諸宗派と諸宗教の書』(al-Shahrastānī, *Milāl wa'l-Nihāl*, 1127/28年執筆)、イブン・イスファنديヤール^⑩『タバリスターン史』(Ibn Isfandiyār, *Tārīkh-i Ṭabaristān*, 1216/17年執筆)である。『統治の書』はニザール派が活動を始めた時期に執筆され、それから暫くして分派学^⑪の書である『諸宗派と諸宗教の書』が執筆された。そして、『タバリスターン史』はニザール派の本拠地があった地域の地方史である。

a. ニザーム・アルムルク『統治の書』

ニザーム・アルムルクは、この史料の中でイスマール派をバーティン派(Bāṭini)と呼び、「バーティン派たちには、彼らが反乱を起こすたびに名前や呼び名があり、この理由で町や地域ごとに彼らを他の名称で呼ぶ。しかし、実際にはすべて同一である^⑫」と説明する。そして、イスマール派の各地での呼称として12の名称を挙げているが、その中にはイスマール派から分派したカルマト派(Qarmatī)という名称も含まれている^⑬。そのため、『統治の書』では、イスマール派から分派した集団も一括りにして「バーティン派」と呼んでいることがわかる。

さらに、ニザーム・アルムルクは、「彼ら（バーティン派）は自分たちをタアリーム派（Ta'limi）やこれに似た〔言葉〕で呼ぶ^⑭」と述べ、イスマール派の自称をタアリーム派だと説明する。タアリーム派とは、宗教的権威への絶対的な服従をイスマール派以上に強調した教示（ta'lim）を展開したニザール派を指す名称である^⑮。タアリーム派（ニザール派）もニザーム・アルムルクにとってはイスマール派であるとする認識に変わりはない。しかし、タアリーム派をバーティン派の自称だとするほどニザール派はよく知られた集団であったことや、ニザーム・アルムルクは彼らのことを注視していたであろうことが窺える。

b. シャフラスターニー『諸宗派と諸宗教の書』

シャフラスターニーは、イスマール派をイマーム派から分派した集団の一つであるとして次のように説明する。すなわち、イスマール派には、6代目イマーム・ジャアファルの息子であるイスマールにイマーム位を認める集団と、イスマールの息子であるムハンマドにイマーム位を認める集団があり^⑯、後者はムバーラク派と呼ばれて、このムバーラク派にバーティン派という集団がいるとする^⑰。さらに、このバーティン派について、シャフラスターニーは別に設けている「イスマール派」という項目で次のように言及している。

私は彼ら（イスマール派）の初期の教義について述べ、その後、新教宣組織（al-da'wat al-jadida）の指導者の教宣組織（da'wa）について述べる。彼らのもっとも有名な呼び名はバーティン派である。^⑱

新教宣組織とは、ニザール派の自称である。彼らはファーティマ朝の教宣組織を「旧教宣組織（al-da'wat al-qadima）」と呼ぶ一方で、自分たちのことを新教宣組織と呼んでいた。シャフラスターニーは新教宣組織についてさらに言及しているが、その前に「イスマール派」の項目の後に設けられた「バーティン派」という項目の一部の引用を次に示しておきたい。

彼ら（バーティン派）にはこの他に、様々な人々の言語によって多くの呼び名がある。イラクではバーティン派、カルマト派、マズダク派と呼ばれ、また、ホラーサーンではタアリーム派やムルヒド派〔と呼ばれる〕。彼ら（バーティン派）は「我々はイスマール派である。なぜなら、我々はこの名とこの人でもってシーア派の諸分派（fi'raq al-shi'a）と区別されるからだ」と言う。^⑲

ここでは、イスマール派から分派した集団やその他の集団の呼び名が、イスマール

派の呼び名とされていると説明している。タアリーム派については、この引用とは別の部分でイスマーイール派から分派した集団の中でもっとも有名であると説明しており、その呼称を al-Bāṭiniya al-Ta'limiyya と記している²²。そのため、シャフラスターニーは、タアリーム派を、パーティン派、つまり、イスマーイール派から分派した集団であると認識していることがわかる。また、彼はこのタアリーム派についても別に項目を設けると説明しているが、その見出しの項目はない。しかし、タアリーム派について言及されている箇所については、次のように考えられる。すなわち、タアリーム派は先に挙げた新教宣組織と同様にニザール派を指す名称である。また、新教宣組織についてもシャフラスターニーはイスマーイール派の教義について説明した後述べる²³と説明している。以上から、タアリーム派と新教宣組織はニザール派のことであり、この2つについて述べるとしている箇所は同じであると考えられる。そのため、次に挙げる新教宣組織について述べられている部分がタアリーム派の項目の冒頭であると考えられる。

新教宣組織の支持者たちがこの道から逸れたのは、ハサン・ブン・アルサッバーフ（ハサン・サッバーフ）が自身の教宣を表明したときであった。彼は、自身の言葉に「他人を」何度も従わせようとしたが出来ず、仲間に援助を求めて城塞の中で守りを固めた。彼が初めてアラムート城塞に入ったのは、483年シャアバーン月（1090年9-10月）である。²³

「この道」というのは、この引用の前で説明されているイスマーイール派の教義のことであろうから、ここからも新教宣組織がイスマーイール派から分派した集団とみなされていることがわかる。また、新教宣組織はハサン・サッバーフ率いる集団であることも明記されている。

また、ムルヒド派については、その実態はタアリーム派と同じくニザール派のことであると考えられる。ここではホラーサーンにおけるイスマーイール派の呼称として紹介されているにすぎないが、呼称の例として取り上げられるほどニザール派の存在はその地でよく知られていたことを示していると言える。

c. イブン・イスファンディヤール『タバリスターン史』

『タバリスターン史』では、ハサン・サッバーフの教宣が「真実を覆い隠す (talbis)」ものであると説明されたり、ハサン・サッバーフを「悪魔 (iblisvār)」のようであるとするなど辛辣な表現が多い。また、ハサン・サッバーフらへの戦闘を「聖戦 (jihād)」としていることから、イブン・イスファンディヤールが彼らに抱いていた憎悪の念が強く伝わってくる。このような記述は、イブン・イスファンディヤールの後援者であるバーワンド朝君主アルダシール

(在位1173-1206年)の息子がニザール派によって殺害されているため²⁶であろうと考えられる。一方で、ハサン・サッバーフの教宣経路や活動に関しては詳細に記され、ニザール派はよく知られた集団であったことが窺える。次に挙げる二つの引用におけるバーティン派は、ハサン・サッバーフが作ったと説明されていることからニザール派を指していることがわかる。

ハサン・サッバーフは、〈中略〉レイの地域においてバーティン派と呼ばれるイルハードの共同体 (millat-i ilhād) を作り上げた。²⁷

彼 (ハサン・サッバーフ) はそこからアラムート城塞に達し、自身の教宣を公然と行い、ムルヒドたちをイスファハーンに送った。〈中略〉マラーヒダは様々な山の頂を征服し、彼らの暴動の火はあがった。彼らは諸城塞を建て、彼らの不信仰 (kufr) の害は様々な方向へ達した。²⁸

マラーヒダは、12世紀後半からニザール派に対して使用された呼称である。『タバリスタン史』でもニザール派の支持者はムルヒド、その集団はマラーヒダと呼ばれている。マラーヒダ (malāḥida) とは、「正しき道筋から逸れる、傾く」という意味のアラビア語動詞の派生形第4形 alḥada の能動分詞の複数形である。同じ派生形第4形の動名詞 ilhād は、アッバース朝期から思想上の逸脱²⁹のことを指す。ilhād を行う者、すなわち、思想上の逸脱行為をする者が mulḥid であり、神学者や法学者たちは自身の思想上の敵に対し罵倒の意味を込めて使用していた。³⁰ イブン・イスファンディヤールもハサン・サッバーフはイルハードの共同体を作り上げた³¹と述べており、マラーヒダがもつ言葉の意味と一致した説明である。

(2) 呼称の変遷とマラーヒダ

以上で確認したニザール派の呼称とその定義の変遷から、次のことが明らかになった。まず、ニザール派が出現した当初に執筆された『統治の書』では、イスマーイール派から分派した集団と一括りにして認識されてバーティン派と呼ばれ、ニザール派もその内に含まれていた。次にそれから暫くしてニザール派の2代目指導者ブズルグ・ウミード (在位1124-1138年) の時代に執筆された『諸宗派と諸宗教の書』では、ニザール派がイスマーイール派から分派した集団だと説明されている。ただ、著者であるシャフラスターニーはそうに認識しているものの、当時の認識としては『統治の書』と同じくイスマーイール派から分派した様々な集団の名称が同派の呼称という認識であり、ニザール派も例外ではなかった。しかし、その後6代目指導者ハサン3世 (在位1210-1221年) の頃に書かれた『タバリスタン史』では、本稿で定義したニ

ザール派と同義でバーティン派、マラーヒダという呼称が使用されている。このように、ニザール派は、イスマール派として大きくまとめて認識されていた集団から、イスマール派から分派した集団として認識されていった。また、彼らはイスマール派としてまとめて認識されていた頃からその集団の中心として注目されており、イランにおいて勢力をもつ集団とされていたことがわかる。

一方で問題となるのは、ニザール派に定着した呼称のマラーヒダの持つ意味が、本稿で明らかにしたいニザール派像とかけ離れているということである。確かにニザール派にはマラーヒダと呼ばれるにふさわしい一面もあったのだが、その認識のみの集団であれば、1256年のモンゴル軍侵攻を待つことなく滅亡していたであろう。やはり、ニザール派はマラーヒダと呼ばれながらも言葉通りに彼らをマラーヒダとしない見方、ニザール派像が同じくらい強く存在したはずである。そこで、次にニザール派滅亡直後に執筆されたバイダーウィーのイラン史『諸史の秩序 (Naṣīr al-Dīn Bayḍāwī, *Nizām al-Tawārikh*)』が提示するニザール派像からこの点を明らかにしていきたい。

第2章 バイダーウィー『諸史の秩序』から見るニザール派

(1) ニザール派歴代指導者の評価

バイダーウィー (?-1316年^①) はイラン南部のシーラーズにあるバイダーの法学者の家に生まれたシャーフィイー派法学者であり、アシュアリー学派神学者である。イルハーン朝のアバカ(在位1265-82年)に任命されてファールス地方のカーディーに、アバカの死後はシーラーズのカーディーに就任した^②。アルゲーン(在位1284-91年)の時代には、故郷バイダーのカーディーを務めている^③。また、彼は『カーディーの注釈書 (Tafsīr al-Qāḍī)』として知られるクルアーンの注釈書『啓示の光と比喩的解釈の秘密 (*Anwār al-Tanzīr wa Asrār al-Ta'wīl*)』の著者としても有名である。

バイダーウィーは『諸史の秩序』の序文において、行政に携わる人々に向けた歴史の要約書の作成を目的として本書を執筆したと述べている^④。『諸史の秩序』は要約書という性格上、記述が簡略であり、分量も多いとは言えない。また、管見の及ぶ限り、以下で見ていくバイダーウィーのニザール派観はあまり見られないものであると言える。しかし、この書は後世の様々な歴史書で利用されており、残されている写本も少なくない^⑤。また、彼の執筆目的や経歴を鑑みても、彼が提示するニザール派像は決して珍しいものでなく、イランにおけるニザール派像の一例であると言える。

バイダーウィーは、本書第4部において、アッバース朝期(749-1258年)にイランで勢力を持っていた集団について、次のように紹介している。

アッバース朝の時代において、独立してイランの国々で統治を行った偉大なスルターンたちや帝王たちの歴史について。彼らは、九つの集団である。〔すなわち、〕サッファール朝（861-1003年）、サーマーン朝（819-1005年）、ガズナ朝（977-1187年）、ダイラム人たち（ブワイフ朝、932-1062年）、セルジューク朝（1038-1194年）、ゲール朝（1000?-1215年）、ホラズム朝（ホラズムシャー朝、1077-1231年）、サルグル朝（1148-1282年）、マラーヒダ、モンゴルである。^{③⑥}

この頃のイランには他にも諸勢力が存在したにも関わらず上の引用で10の集団名が特に取り上げられていることには、本書がイランの歴史の要約書であることが関わっていると考えられる。つまり、要約書という性質上、少なくともバイダーウィーにとってイランの歴史を語る上で特に重要で省くことのできない集団のみが取り上げられているということである。さらに、この引用から、ここで取り上げられている諸集団は、アッバース朝期に「独立」してイランで統治を行っていたとバイダーウィーがとらえていた集団である。従って、マラーヒダ、つまり、ニザール派もこれらの諸集団と並んでイランを統治していた一勢力であり、「偉大なスルターンたちや帝王たち」としてイランの歴史を語るうえで省くことのできない重要な集団だとされているのである。

ニザール派の歴代指導者については、「第6族マラーヒダと呼ばれるクヒスターンの王たち」^{③⑧}という項目がある。この項目には第4部の他の集団では述べられていない統治者の没年に関する記述があり、ニザール派に対する関心の高さが窺える。以降、『諸史の秩序』では歴代のニザール派の指導者がどのように説明されているのかについて確認していこう。

初代ハサン・サッバーフ（在位1090-1124年）は、公正さと敬虔さをもった人物であり、いつもシャリーアの諸規定を遵守していたと説明されている。^{③⑨}また、イスマール派の出身である彼の言葉に魅了されて教宣を受け入れたアラムート城塞の周辺地域に住む大部分の人々は、進んで彼をハーキムにしたとしている。^{④①}さらに、彼はアラムート城塞からあらゆる城塞や地域にむけて攻撃を行ってクヒスターンの大部分を征服し、エジプトのムスタンスィル^{④②}から代理と委任に関する誓約書（ahd-nāma）を送られたと述べられている。^{④③}

次に2代目ズルグ・ウミードは、ダイラム人であること、^{④④}シャリーアの諸習慣やスンナの外面的な意味の遵守に熱心な人物であったことが述べられている。

3代目ムハンマド1世（在位1138-62年）の項目では、彼自身のことよりも息子のハサン2世（在位1162-66年）に関する記述が多い。ムハンマド1世には「ハサン〔2世〕という名の極めて信仰の害である息子」^{④⑤}がおり、禁じられた行為に夢中になったり、無効なクルアーンの解釈をしていたと説明されている。^{④⑦}また、ハサン2世が自分こそイマームであると主張するように

なると、「ハサンは私の息子である。私はダイラム人であって、イマームではない」と言ってハサン2世がイマームであることを否定し、ハサン2世の主張を信じる者は不信仰者であるとしたと述べられている^{④⑤}。

ハサン2世については彼自身の項目においても、指導者となった後に「イルハードの基礎を定め」てイスラームから逸脱するようなことをはじめ、ラマダーン月が終わる前に断食をやめて断食明けの説教を行い、自分たちに課せられていた宗教的な義務がお隠れのイマームによって取り除かれたと宣言したと述べられている^{④⑤}。また、ムハンマド2世（在位1166-1210年）に関しては、ハサン2世のイスラームから逸脱するような方針を踏襲したと説明されている^{⑤①}。

一方で、6代目ハサン3世は、彼の祖父の代から続いたイスラームから逸脱するような体制を廃止し、周囲からも信仰の健全さが認められて「新ムスリム」と呼ばれていたと説明されている^{⑤②}。7代目ムハンマド3世（在位1221-55年）に関しては、ほとんどの時間を引きこもって過ごし、彼の従者によって殺害されたと述べられている^{⑤④}。そして、最後の指導者である8代目フルシャー（在位1255-56年）は、即位して一年後にすべての城塞や地域をモンゴル軍のフラグに明け渡し、彼の代でニザール派の王権が終焉したと述べられている^{⑤⑤}。

(2) 『諸史の秩序』におけるニザール派認識

バイダーウィーが初代ハサン・サッバーフ、2代目ブズルグ・ウミード、そして6代目ハサン3世に対して、マラーヒダという言葉が本来もつ、イスラーム法から逸脱した者たちという意味からほど遠い評価をしている点は興味深い。マラーヒダと呼びながらも彼らを言葉通りに認識していなかったのである。その一方で、4代目ハサン2世と5代目ムハンマド2世に対する評価は、この2人の時代のニザール派がグラート化したためか、他の指導者と明らかに異なる。このように、グラート化した時代のあるニザール派を、バイダーウィーはいかにしてイランの統治者とみなしたのであろうか。この点について考えるために、彼らの在位期間について述べられている文章に使用されている言葉に注目したい。第4部の各集団の冒頭部分では、歴代の君主や指導者の名前の後に「〇〇として〇年統治した」、「〇〇の期間が〇年であった」、また、単に「〇〇であった」というような在位期間を示す文章（以降「在位期間文」と呼ぶ）が続く。それを表にしたものが表1である。表1の「第6族マラーヒダ」を見ると、在位期間文（B欄）の「〇〇として」の部分は、歴代の8名の指導者のうち、5名は「帝王として（pādshāhi）」となっている。しかしながら、ムハンマド1世は「ハーキムであった（ḥākim būd）」、ハサン2世は「スルターンとして（salṭanat）」、ムハンマド2世は「ハーキムとして（ḥokūmat）」となっている。この3名のうち、ムハンマド1世について言えば、彼の項目内では「父（ブズルグ・ウミード）の命令と名声によって帝王たる位を得て（pādshāhi yaft）、彼の

表 1 『諸史の秩序』 第 4 部に挙げられる君主・指導者とその在位期間文及び項目文

		A		B	C
		統治者および指導者名		在位期間文	項目文の引用（「」で表記）・要約
第 1 族 サッフアール朝	1	ヤアクープ・ブン・レイス		帝王として統治した	戦闘によって独立を手にした
	2	アムル・ブン・レイス		帝王として統治した	バグダードにおいて、彼の名前でフトバが読まれた
	3	ターヒル・ブン・ムハンマド・ブン・アムル		帝王として統治した	彼の代でサッフアール朝国家 (doulat) の時代が終わった
第 2 族 サーマーン朝	1	アブー・イブラーヒーム・イスマーイール・ブン・アフマド・サーマーン		スルターンとして統治した	・カリフと官庁に服従しており、またそのようにすることを当然なこととみなしていた ・「彼の王権の期間は8年であった」
	2	アミール・アブー・ナスル・アフマド・ブン・イスマーイール・サーマーン		帝王として統治した	「帝王たる位の規則の上に立った」
	3	アミール・アブー・アルハサン・ナスル・ブン・アフマド・サーマーン		帝王として統治した	「彼は30年〈中略〉帝王たる位の旗を掲げた」
	4	アミール・ヌーフ・ブン・ナスル・サーマーン		帝王として統治した	対象となる文章なし
	5	アミール・アブド・アルマリク・ブン・ヌーフ		帝王として統治した	対象となる文章なし
	6	アミール・マンスール・ブン・ヌーフ		帝王として統治した	「彼の王権の期間は15年と9か月であった」
第 3 族 ガスナ朝	7	ヌーフ・ブン・マンスール		帝王として統治した	「彼の王権の期間は21年と7か月であった」
	8	マンスール・ブン・ヌーフ		帝王として統治した	「彼が帝王として統治した1年と9か月」
	9	アブド・アルマリク・ブン・ヌーフ		帝王として統治した	「帝王たる位の順番が彼に達したとき」
	10	ムンタサル・イスマーイール・ブン・ヌーフ		記載なし	対象となる文章なし
	1	マフムード・ブン・セブクテキン		帝王として統治した	・「ホラーサーンとシジスターンの地域で独立した」 ・「スルタンという称号を得た」
	2	マスウード・ブン・マフムード		帝王として統治した	・「ホラーサーンとイラクのスルターンたる位をマスウードへ」

第3族 ガズナ朝	3	ムハンマド・ブン・マフムード	帝王として統治した	「インドの国々とガズナの地域で帝王として統治した」
	4	マウドウード・ブン・マスウード	帝王として統治した	対象となる文章なし
	5	マスウード・ブン・マウドウード	ハーキムとして統治した	父親が死去したとき幼子であったため、数日帝王たる位の上にいたが、すぐに彼のおじが即位した
	6	アリー・ブン・マスウード	帝王として統治した	「帝王たる位の順番が彼に達したとき」
	7	アブド・アッラシード・ブン・マフムード	帝王として統治した	「彼は7年近く帝王たる位の旗を掲げ」
	8	イブラーヒム・ブン・マスウード	帝王として統治した	「彼の国家の時代は」
	9	マスウード・ブン・イブラーヒム	帝王として統治した	「彼は16年間帝王たる位の規則の上に立った」
	6	アリー・ブン・マスウード	帝王として統治した	「帝王たる位の順番が彼に達したとき」
	7	アブド・アッラシード・ブン・マフムード	帝王として統治した	「彼は7年近く帝王たる位の旗を掲げ」
	8	イブラーヒム・ブン・マスウード	帝王として統治した	「彼の国家の時代は」
	9	マスウード・ブン・イブラーヒム	帝王として統治した	「彼は16年間帝王たる位の規則の上に立った」
	10	アルスラーン・シャー・ブン・マスウード	帝王として統治した	対象となる文章なし
第4族 ダイラム人たち (ブワイフ朝)	11	バフラーム・シャー・ブン・マスウード	帝王として統治した	対象となる文章なし
	12	ホスロー・シャー・ブン・バフラーム・シャー	帝王として統治した	対象となる文章なし
	1	イマード・アッダウラ・アリー・ブン・ブワイフ	帝王として統治した	・「フトバに因してはカリフたちの祈禱の後に彼の祈禱が行われた」 ・「彼のイマームたる位の期間」
	2	ルケン・アッダウラ・ハサン・ブン・ブワイフ	帝王として統治した	「彼の王権の期間は28年であった」
	3	ムイッズ・アッダウラ・アフマド・ブン・ブワイフ	帝王として統治した	対象となる文章なし
	4	アズド・アッダウラ・アブー・スジャヤ・ブン・アルハサン	彼の王権の期間	・世界のどの王たちよりも知識と芸術において抜きんでており、彼の偉業と功労は有名 ・「彼の王権の期間は34年であった」

第4族 ダイラム人たち (アワイフ朝)	5	ファフズ・アッダウラ・アリー・ブン・ハサン	ハーキムとして統治した	「彼は13年と11か月以上アミールたる位 の中で生きた」
	6	ムアッイド・アッダウラ・ブン・ハサン	帝王として統治した	対象となる文章なし
	7	イッズ・アッダウラ・ブン・ムイッズ・アッダウラ	ハーキムとして統治した	項目なし
	8	マジュド・アッダウラ・ロスタム・ブン・ファフル・ アッダウラ	帝王として統治した	項目なし
	9	シャフル・アッダウラ・ブン・アズド・アッダウラ	帝王として統治した	「彼は3年間帝王として統治した」
	10	サムサム・アッダウラ・ブン・アズド・アッダウラ	イマームとして統治した	・「シャラフ・アッダウラは〈中略〉ア ミールたる位を再び彼のもとに置いた」 ・「彼は9年帝王として統治した」
	11	バハー・アッダウラ・ブン・アズド・アッダウラ	帝王として統治した	「彼は24年と3か月帝王として統治した」
	12	シャラフ・アッダウラ・ブン・バハー・アッダウラ	イマームとして統治した	・アミールの位 (amir) が与えられた ・「彼は5年と2か月アミールとして統 治した」
	13	スルターン・アッダウラ・ブン・バハー・アッダウラ	帝王として統治した	「彼は12年と4か月帝王として統治した」
	14	イマード・アッディーン・アッラー・マルズババーン・ ブン・スルターン・アッダウラ	ハーキムとして統治した	対象となる文章なし
	15	マリク・アッラヒーム・アブー・ナスル・ブン・イ マード・アッディーン・アッラー	ハーキムとして統治した	対象となる文章なし
	16	マリク・アブー・マンスール・フーラードストゥーン	ハーキムとして統治した	対象となる文章なし
	17	マリク・アブー・サイード・ホスロー・シャ ー	記載なし	対象となる文章なし
	18	アブー・アリー・ブン・イマード・アッディーン・ア ッラー	記載なし	対象となる文章なし
	1	スルターン・ルクン・アッディーン・アブー・タリ ブ・トゥグリル・ベク・ムハンマド・ブン・ミーカー イール・ブン・セルジュエク	スルターンとして統治した	・「この王朝の最初のスルターンである」 ・「彼の王権の期間は26年であった」
	2	スルターン・イッズ・アッディーン・アブー・スジ ヤー・アルブ・アルスラーン	彼の王権の期間	「彼の王権の期間は12年であった」
	3	スルターン・ムイッズ・アッディーン・アブー・アル ファトフ・マリクシャール・ブン・アルブ・アルスラー ン	帝王として統治した	・世界の国々の多くが彼の所有下にあっ た ・20年間幸福に世界の支配者 (jahāndari be-sar) として過ごす

第5族 セルジューク朝	4	スルタン・ルクン・アッディーン・アブー・アルファ ザーリス・バルキヤールク・ブン・マリクシャー	イマームとして統治した	・「彼の王権の期間は12年であった」
	5	スルターン・ギヤース・アッディーン・アブー・スジ ヤー・ムハンマド・ブン・マリクシャー	スルターンとして統治した	・④バルキヤールの項目で「ムハンマ ドが帝王になった」との記載あり ・「スルターンの位が彼に定まった」「彼 の王権の期間は13年であった」
	6	スルターン・イッズ・アッディーン・アブー・アル ハーリス・サンジャル・ブン・マリクシャー	スルターンとして統治した	・「20年間兄弟たちの時代にホラーサー ンの帝王であり、ムハンマドの死後、4 年帝王として統治した」
	7	スルターン・ムギース・アッディーン・アブー・アル カーシム・マフムード・ブン・ムハンマド	スルターンとして統治した	対象となる文章なし
	8	スルターン・ルクン・アッディーン・アブー・タリ ブ・トゥグリル・ブン・ムハンマド	ハーキムとして統治した	対象となる文章なし
	9	スルターン・ギヤース・アブー・アルファトフ・マス ウード・ブン・ムハンマド	スルターンとして統治した	「17年イラクのスルターン位を務めた」
	10	スルターン・ムギース・アッディーン・マリクシ ヤー・ブン・マフムード・ブン・ムハンマド	スルターンとして統治した	対象となる文章なし
	11	スルターン・ギヤース・アッディーン・アブー・スジ ヤー・ムハンマド・ブン・マフムード	彼の帝王たる位の期間	・「帝王たる位に座した」 ・「彼の帝王たる位の期間は7年であっ た」
	12	スルターン・ムイッズ・アッディーン・アブー・アル ハーリス・スレイマーン・シャー・ムハンマド・ブ ン・マスウード	ハーキムとして統治した	対象となる文章なし
	13	スルターン・ルクン・アッディーン・アルスラーン・ ブン・トゥグリル・ブン・ムハンマド	帝王として統治した	「15年と7か月帝王として統治した」
	14	スルターン・ムギース・アッディーン・トゥグリル・ ブン・アルスラーン	帝王として統治した	「スルターンの位の順番が彼に達したと き」
	1	ハサン・サッバーフ	帝王として統治した	「35年間帝王として統治した」
	2	ブズルグ・ウミード	帝王として統治した	「彼は14年間帝王として統治した」
	3	ムハンマド1世	ハーキムであった	「帝王たる位を得た」
第6族 マラーヒダ (ニザール派)	4	ハサン2世	スルターンとして統治した	「イルハードの基礎を定めた」
	5	ムハンマド2世	ハーキムとして統治した	父ハサン2世の方針を踏襲した

第8族 ホラズム朝 (ホラズムシャー朝)	3	ホラズムシャー・イール・アルスラーン・ブン・アトスズ	帝王として統治した	セルジューク朝の弱体化によって独立
	4	ホラズムシャー・スルターン・シャー・ブン・イール・アルスラーン	帝王であった	「スルターン・シャーの帝王たる位」
	5	ホラズムシャー・アラール・アッディーン・テキシュ・ブン・イール・アルスラーン	帝王として統治した	セルジューク朝が終焉し、ホラサーン全土が彼のものとなった
	6	ホラズムシャー・ムハンマド・ブン・テキシュ	帝王として統治した	・ホラズムシャー朝の最盛期
	7	スルターン・ジャラール・アッディーン・ブン・ムハンマド	帝王として統治した	対象となる文章なし
	8	スルターン・ギヤース・アッディーン・ムハンマド・ブン・ジャラール・アッディーン	記載なし	項目なし
	1	フラグ・ハーン	記載なし	対象となる文章なし
	2	アバカハーン	記載なし	対象となる文章なし
第9族 モンゴル				

(al-Bayḍawī 86-133 より、筆者作成)

後継者となった^{⑤⑦}」というように説明されている。また、「ハーキム」の語はハサン・サッバーフに対しても使用されていることから、少なくともムハンマド1世に対するバイダーウィーの評価は、「帝王として統治した (pādshāhi kard)」記されている他の5名と同じだととらえてよいだろう。

このように、ニザール派の指導者たちの在位期間文に使用される単語は、彼らの評価と一致している。そこで、以降第4部の他の集団の在位期間文にもこのような使い分けがあるのかを確認し、この使い分けにバイダーウィーが込めた意味を明らかにしたい。

第1族から第9族までの君主および指導者は全部で86人である。そのうち、在位期間文で「帝王として」もしくは「帝王たる位の期間 (muddat-i pādshāhi ū)」が使用されている人物は、表1より過半数以上の52人である。さらに、各人物の項目(以降「項目文」と呼ぶ)を読んでいくと、次のようなことが言える。まず、その人物の項目文内で「○○として統治した」と述べられているとき、多くの場合「○○として」にあたる言葉には、その人物の在位期間文で使用されていた言葉が用いられている。このことは、項目文内で「○○の位が彼のもとに達した」や「○○の位を得た」と書かれている場合も同様である。在位期間文で使用されている言葉と項目文における言葉が異なる人物も見られるが、ブワイフ朝の「アミール」、セルジューク朝の「スルターン」、ホラズムシャー朝の「ホラズムシャー」のように、その王朝の君主の称号やその派生語は、「帝王」と併用されている。例えば、第4族ブワイフ朝の①イマード・アッダウラ・アリー・ブン・ブワイフや、第5族セルジューク朝の⑥スルターン・イッズ・アッディーン・アブー・アルハーリス・サンジャル・ブン・マリクシャーなどである。一方で、第7族のサルグル朝では、在位期間文でどのような言葉が使用されていても項目文ではほぼ全員に「帝王」が使用されている。これは、サルグル朝が著者であるバイダーウィーに直接関係する王朝であるためだと考えられる。また、「王権の期間 (muddat-i mulk)」は、在位期間文にどのような言葉が使用されていても項目文において見られる表現である^{⑤⑧}。

さらに表1を見ていくと、第1族サッファール朝の①ヤアクブ・ブン・ライスや、第3族ガズナ朝の①マフムード・ブン・セブクテキンのように、項目文で「独立した」と述べられている人物の在位期間文は「帝王として」が使用されている。反対に、項目文内で「カリフに従属していた」と述べられている第2族サーマーン朝の①アブー・イブラーヒーム・イスマーイール・ブン・アフマド・サーマーニーは、在位期間文が「スルターンとして」となっている。また、第3族ガズナ朝の⑤マスウード・ブン・マウドゥードのような即位したときに幼少であったと説明されている者や、第6族マラーヒダの④ハサン・ブン・ムハンマドや⑤ムハンマド・ブン・ハサンのように項目文の評価が低い人物などには「帝王」が使用されていないと言える。

従って、第4部の他の集団でも在位期間文で使用されている単語は、ある程度使い分けられている。検討対象となる文章が項目文にない人物や、そもそも項目文のない人物もあり、必ずしも在位期間文に使い分けがあると断言することはできないが、少なくとも「帝王」という言葉は特別な意味合いを込められて使用されていると言ってよい。ニザール派もハサン2世とムハンマド2世を除く指導者には、在位期間文もしくは項目文において「帝王」という言葉が使用されていた。つまり、バイダーウィーは、このグラート化した時代の2人を除くことでニザール派の指導者たちを「偉大なスルターンたちや帝王たち」とできるとし、イランを統治した正当な支配者というニザール派像を提示しているのである。

おわりに

本稿では、「異端」な存在として語られることの多いニザール派の別の一面を明らかにすべく考察を行ってきた。その結果、12-13世紀のイランにおいて、ニザール派が以下のように認識されていたことを明らかにした。

まず、ニザール派がイランに本拠地を構えて活動をはじめた11世紀後半に執筆された『統治の書』では、彼らを他の集団と一括りにして分派元であるイスマール派として認識していた。この認識は、それから暫くして2代目ブズルグ・ウミードの時代に執筆された『諸宗派と諸宗教の書』でイスマール派から分派した集団だと説明されるように変化した。ただ、当時の認識としては、ニザール派はなおイスマール派としてみなされていたようである。やがて、6代目ハサン3世の時代に執筆された『タバリストーン史』では、上の2つの史料とは異なって、使用されていたバーティン派とマラーヒダという呼称の対象にニザール派以外の他の集団が含まれていない。このように、ニザール派は、時代を経るにつれてイスマール派から分派した集団という認識をもたれていった。また、イスマール派としてまとめて認識されている時代から、彼らはその集団の中心となる存在であったと言える。

次に、バイダーウィー『諸史の秩序』においてニザール派は、グラート化した時代の2名の指導者を除いてイランを統治した正当な支配者とされていた。バイダーウィーによるこのようなニザール派観は、今回本稿で使用した他の史料などと比べても特殊ではあるが、この史料が行政職につく者に向けたイラン史であることやバイダーウィー自身の経歴を考慮しても軽視することのできない内容であることは間違いない。さらに、彼の提示するニザール派像はイランにおいて決して珍しいものでなく、同地のニザール派像の一例であったと言える。歴史の要約書である本書にニザール派が登場すること自体、彼らの存在の大きさを物語っている。

従って、以上のことをまとめると、第1章で確認したイランにおいて勢力をもった集団だというニザール派の認識が、『諸史の秩序』では単に勢力をもっていた集団の1つという認識に

とどまらず、イランにおける正当な支配者として評価されるに至っている。ニザール派の長きに亘る存続が『諸史の秩序』で確認したようなニザール派像を形成したと言える。反対に、このような集団であると周囲に認識されていたことが彼らの存続期間の長さに影響を与えていたとも言える。ただし、『諸史の秩序』はニザール派の滅亡後に執筆された史料であるため、このようなニザール認識がニザール派と同時代に執筆された史料でも確認できるのかについて明らかにする必要がある。そうすることで、今回本稿で明らかにしたニザール派像はより明確なものになるであろう。また、ニザール派と同時代に活動していた彼らの周辺王朝との関係を探ることで「異端」だけではないニザール派の新たな一面が見えてくるはずである。これらは筆者の今後の課題としたい。

一次資料

- Awliyā Allāh Āmulī. *Tārīkh-i Rūyān*. ed. Manūchīhr Sutūda, Tehran, 1959.
 al-Bayḍāwī, Qādi Nāṣir al-Dīn. *Nizām al-Tawārikh*. ed. Mir Hāshim Muḥaddith, Teheran, 2003/4.
 Ibn Isfandiyār. *Tārīkh-i Ṭabaristān*. ed. 'Abbās Iqbāl, Iran, 1987.
 Nizām al-Mulk. *Siyāsatnāma*. ed. H. Darke, Tehran, 1976.
 al-Shahrastānī. *Milāl wa'l-Nihāl*. ed. Aḥmad Fahmī Muḥammad, Beyrūt, 1992.
 Ṣāḥir al-Dīn Mar'ashī. *Tārīkh-i Ṭabaristān va Rūyān va Māzandarān*. ed. Ya'qūb Āzhand, and Boris Andreevich Dorn, Tehran 1984.

二次資料

- EI²* : Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12 vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960–2009.
EIr : Yarshater, Ehsan et al. (eds.), *Encyclopaedia Iranica*. 16 vols. London: Routledge and Kegan Paul, 1982–2020: iranicaonline.org (accessed Aug. 22, 2021).
 『岩波イスラーム辞典』大塚和夫ほか（編）、岩波書店、2002。
 Bosworth, Clifford Edmund (1996). “The Isma'ilis of Quhistān and the Maliks of Nimrūz or Sistān.” In: *Mediaeval Isma'ili History and Thought*, edited by Farhad Daftary, Cambridge: Cambridge University Press, 221–229.
 Daftary, Farhad (1996). “Ḥasan-i Šabbāḥ and the Origins of the Nizārī Isma'ili Movement.” In: *Mediaeval Isma'ili History and Thought*, edited by Farhad Daftary, Cambridge: Cambridge University Press, 181–204.
 — (2004). *Ismaili Literature: A Bibliography of Sources and Studies*. London and New York: The Institute of Ismaili Studies.
 Eboo Jamal, Nadia (2002). “The Nizārī Ismaili Da'wa.” In: *Surviving the Mongols: Nizari Quhistani and Continuity of Ismaili Tradition in Persia*, edited by Nadia Eboo Jamal, London and New York: The Institute of Ismaili Studies, 32–39.
 Rabino, M. (1936). “Dynasties du Māzandarān de l'an 50 avant l'hégire à l'an 1006 de l'hégire (572 à 1597–1598), da'près les chroniques locales,” *Journal Asiatique*, 228, 397–474.
 Willey, Peter (2005). “The Rise and Fall of the Nizari Ismaili State.” In: *The Eagle's Nest: Ismaili*

Castles in Iran and Syria, edited by Peter Willey, *The Institute of Ismaili Studies*, 21-37.
 Saleh, Shakib (1995). "The use of Bāṭinī, Fidā'i and Ḥashishī," *Studia Islamica*, 82, 35-43.
 Ivanow, Wladimir (1960). *Alamut and Lamasar: Two mediaeval Ismaili strongholds in Iran An Archaeological Study*. Teheran.

井谷鋼造 (1995) 「Aya Sofya 3605ペルシア語写本 Niẓām al-Tawārīkh 中のセルジューク朝関連の記事について (上)」『追手門学院大学文学部紀要』31、1-15頁。

同上 (1997) 「Aya Sofya 3605ペルシア語写本 Niẓām al-Tawārīkh 中のセルジューク朝関連の記事について (下)」『追手門学院大学文学部紀要』32、1-28頁。

大塚修 (2017) 『普遍史の変貌——ペルシア語文化圏における形成と展開』名古屋大学出版会。

菊地達也 (2005) 『イスマール派の神話と哲学——イスラーム少数派の思想史的研究』岩波書店。

同上 (2009) 『イスラーム教「異端」と「正統」の思想史』講談社。

同上 (2014) 「極端派(グラート)の伝統とアラウィー派」『中東の思想と社会を読み解く』東京大学中東地域研究センター。

ニザーム・アルムルク『統治の書』井谷鋼造・稲葉稜(訳)、岩波書店。

本田実信 (1991) 「マルコ・ポーロの「山の老人」」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会、183-196頁 (初出「異端派イスラムの暗殺者教団について『伝統と現代』14、1972)。

ルイス、バーナード (1973) 『暗殺教団——イスラームの過激派』加藤和秀(訳)、新泉社。

註

- ① イラン北部を横断するアルボルズ山脈中にあった。「アラムート (Alamūt)」の名は、「鷲の教え」もしくは、「鷲の巢」という意味の言葉に由来をもつとされている。この由来は、ダイラム地方のある王が狩りの最中に連れていた鷲によって示された場所にこの城塞を建てたという言い伝えによる [Ivanow 1960: 1; ルイス (加藤訳) 1973: 64-65; Willey 2005: 23]。
- ② 菊地氏によると、ニザール派の分派元であるイスマール派は、自分たちの安全を確保するために教義を門外不出のものとしていたため、イスマール派の周囲にいた人々は同派に対して懐疑と恐怖を感じていたという。また、Shakib Saleh氏によると、ニザール派の主な犠牲者がイランの人々であったため、アラブの歴史家よりもイランの歴史家の方がはるかにニザール派に対する敵意を示しているという [菊地 2005: 2; Shakib Saleh 1995: 37]。
- ③ Daftary 1996: 181-204. また、さらに、このイランの人々によるニザール派への支援はイランの人々の民族意識によるものであると述べられている。
- ④ Eboo Jamal 2002: 32-39.
- ⑤ Willey 2005: 21-37. また、さらに、ハサン・サッパーフがイランにおいて活動していた時代はセルジューク朝内が混乱していた時期であり、彼らの討伐にまで手が回らなかったためにニザール派は勢力を拡大していくことができたとも述べられている。
- ⑥ Bosworth 1996: 221-229.
- ⑦ Shakib Saleh 1995: 35.
- ⑧ 1018/19-92年。セルジューク朝2代目スルターン・アルプ・アルスラーン (在位1063-72年) と3代目スルターン・マリクシャー (在位1072-92年) に仕えた著名な宰相。また、1092年にイラン東部ホラーサーンにある都市ニーシャープールにおいてニザール派の献身者 (fidā'i) によって暗殺された人物としても有名である [「ニザームルムルク」『岩波イスラーム辞典』]。

- ⑨ 1086-1153年。イランのホラーサーン北部にあるシャフラスターンに生まれたアシュアリー学派の神学者。ニーシャープールでアシュアリー学派神学やシャーフィイー派法学などの諸学問を修め、後にニザーミーヤ学院の教授となった[「シャフラスターニー」『岩波イスラーム辞典』]。また、『諸宗派と諸宗教の書』には、ハサン・サッバーフが書いたニザール派に関する小論『四つの基本命題 (*al-Fuṣūl al-Arbʿa*)』も収録されている[Daftary 2004: 114-115]。
- ⑩ イブン・イスファンディヤールについては、詳細がほとんど知られておらず、タバリストーンのおそらくアーモル出身の人物である。バーワンド朝イスバフバド家の君主アルダシール(在位1173-1206年)が彼の後援者であり、『タバリストーン史』もアルダシールの業績を記録するために編集された[大塚 2017: 155]。
- ⑪ 分派学とは、イスラーム教の諸宗派や他宗教の成り立ちや教義を解説する神学の一分野である。キリスト教などの異端・異教論駁書に比べれば客観性が高いが、他派の「誤った」説と比べることで自派の正しさを主張するということを目的としており、あくまでも護教の学としての神学である[菊地 2009: 59-60; 「分派」『岩波イスラーム辞典』]。
- ⑫ Nizām al-Mulk 311: 4-6.
- ⑬ Nizām al-Mulk 311: 6-9.
- ⑭ Nizām al-Mulk 311: 9-10.
- ⑮ 菊池 2005: 100-101.
- ⑯ al-Shahrastānī 170: 7-171: 2. この意見の違いは、ジャアファルの存命中におけるイスマールイールの死に関する解釈の違いから生まれたと説明されている。イスマールイールにイマーム位を認める集団は、イスマールイールは死んだのではなく、アッバース朝カリフから身を隠した状態(「タキーヤ (taqiya)」という言葉が史料中で使われている。タキーヤは、生命や安全に関わる危険から自身の信仰を隠すことであるが、ここでは、目に見えず、直接的な交流ができないイマームのお隠れの状態である「ガイバ (ghayba)」と同じような意味で使用されていると考えられる)だとする。一方、ムハンマドにイマーム位を認める集団は、イスマールイールは死んでおり、彼のイマーム位は息子のムハンマドに渡ったとする[al-Shahrastānī 170: 7-171: 2; 「ガイバ」「タキーヤ」『岩波イスラーム辞典』]。
- ⑰ 「ムバーラク」は、イスマールイールの通り名であった。
- ⑱ al-Shafrastānī 171: 1-7.
- ⑲ al-Shafrastānī 201: 5-6.
- ⑳ 菊池 2005: 100-101.
- ㉑ al-Shafrastānī 202: 1-3.
- ㉒ al-Shafrastānī 171: 5-7.
- ㉓ al-Shahrastānī 204: 21-205: 2.
- ㉔ Ibn Isfandiyār 28: 16-17.
- ㉕ Ibn Isfandiyār 33: 3-4.
- ㉖ Mar'ashī 264: 2-5.
- ㉗ Ibn Isfandiyār 27: 14-15.
- ㉘ Ibn Isfandiyār 32: 8-33: 1.
- ㉙ 菊地氏によると、「思想上の逸脱」とは、①極端な思想(神の属性の否定、二元論の主張など)、②イスラーム教そのものに対する否定(物質主義、無神論など)などのことである[菊地 2009: 55]。アッバース朝期以前、ウマイヤ朝期には、ilḥād を、ムスリム共同体を棄てることや正統カリフに対する反乱を示すことに使用し、mulḥid は「反逆者 (bāghī)」や「信仰の列を裂く者

(shākhkh al-'aṣā)」と同義であった [“Mulhid,” *Elr*²].

- ③⑩ 菊地 2009: 54-55.
- ③⑪ バイダーウィーの没年に関しては諸説あるが、1316年にタブリーズで死去したという説がもっとも有力である。その他には1286年、1292年、1293年、1308/09年、1310/11年の説がある [“Bayzāwī,” *Elr*]
- ③⑫ “Bayzāwī,” *Elr*.
- ③⑬ “Bayzāwī,” *Elr*.
- ③⑭ al-Bayḍāwī 2: 6-3: 5. この点に関しては、すでに井谷氏の指摘がある [井谷 1997: 24].
- ③⑮ 『諸史の秩序』は、1329/30年に執筆されたハムド・アッラー・ムスタウフィー『選史』(Ḥamd Allāh Mustawfī, *Tārīkh-i Guzīda*) や、1332/33年に執筆されたシャバーンカーライー『諸系譜集』(Muḥammad b. 'Alī Shabānkārāī, *Majma' al-Ansāb*) など で引用されている [井谷 1995: 2].
- ③⑯ al-Bayḍāwī 85: 3-5.
- ③⑰ 「9つの集団」と述べられているにも関わらず、10の集団名が書かれている。これは、この10のうち、ゲール朝のみ独立した項目をもたず、ガズナ朝(第3族)の項目の末尾で簡潔に述べられているのみであり、そのため、「9つの集団」というのは、ゲール朝を除く9つの集団であると考えられる [al-Bayḍāwī 96: 13-97: 7].
- ③⑱ al-Bayḍāwī 115: 1-118: 11. 115頁の注釈によると、写本によってはこの項目がないものもあるという。
- ③⑲ al-Bayḍāwī 115: 17-18. ハサン・サッバーフがシャリーアを遵守していたことについては、「自身の息子を飲酒のために殺害したほどこれに熱心であった」と説明されている [al-Bayḍāwī 115: 18-19].
- ④⑩ al-Bayḍāwī 115: 19-116: 3.
- ④⑪ ファーティマ朝8代目カリフ(在位1036-94年)。彼の没後、9代目カリフとして即位したのがムスタアリー(在位1094-1101年)であるが、ハサン・サッバーフ率いるイランとシリアの教宣組織は廃嫡されたムスタンスィルの長子ニザールを支持し、同王朝と断絶して後のニザール派となった。
- ④⑫ al-Bayḍāwī 116: 3-5.
- ④⑬ al-Bayḍāwī 116: 8-9.
- ④⑭ al-Bayḍāwī 116: 11.
- ④⑮ al-Bayḍāwī 116: 16.
- ④⑯ al-Bayḍāwī 116: 16-117: 1.
- ④⑰ al-Bayḍāwī 117: 1-2.
- ④⑱ al-Bayḍāwī 117: 2-5.
- ④⑲ 「大キヤーマ(大復活)」と言われるもので、ハサン2世は559年ラマダーン月17日(1164年8月8日土曜日)に信徒たちをメッカに背を向けるように配置して大復活の到来を宣言し、自分たちがイスラーム法から解放されたことを告げて祝宴を開いた [本田 1991: 191].
- ⑤⑩ al-Bayḍāwī 117: 8-11.
- ⑤⑪ al-Bayḍāwī 117: 13-14.
- ⑤⑫ al-Bayḍāwī 117: 15-18.
- ⑤⑬ al-Bayḍāwī 118: 3-4.
- ⑤⑭ al-Bayḍāwī 118: 5-6.

- ⑤⑤ al-Bayḍāwī 118: 8-11.
- ⑤⑥ グラート (ghulāt) は、「適切な範囲を超えている」「行き過ぎる」という意味をもつアラビア語 ghalā の能動分詞複数形で、極端派とも訳される。これは他称であり、周囲から「度を越している」と認識された集団に対して使用された。グラートとされる基準は様々であり、その定義も時代差や個人差がある [菊地 2009: 113-116; 菊地 2014: 109-111]。
- ⑤⑦ al-Bayḍāwī 116: 14-15.
- ⑤⑧ 第4族ダイラム人たちの④アズド・アッダウラ・アブー・スジャー・ブン・アルハサン、第5族の②スルターン・イッズ・アッディーン・アブー・スジャー・アルブ・アルスラーンには、在位期間文において使用されている。